

本来なら、四月二十三日に実施するはずだった遠足。五年生は別の日に「田植え」があるため、この日は普通授業、学校でお留守番。その他の五学年全員が、それぞれの目的に出かけるはずでした。

特に一年生は、小学校に入って初めての遠足。保護者の方々と立教女学院を表敬訪問し、カードの交換等のセレモニーの後、立教女学院内を女学院の一年生と一緒に散歩し、その後井の頭公園を散策するはずでした。

昨年度はコロナ禍のために稲刈りを除いて遠足はすべて中止。

今年度は同じ轍(てつ)を踏まないようにと、連休明けから二週間以上様子を見ようと、五月二十一日に遠足を延期しました。(もちろん立教女学院の先生と相談の上での話です。)ああ、それなのに、それなのに…。

緊急事態宣言の延長を受けて、遠足も再延期を余儀なくされました。

月曜日のオンライン朝礼で、子どもたちに遠足を九月十七日に再延期することをお伝えし、次のようなお話をしました。

「二十一日の金曜日に予定されていた遠足が無くなりました。無くなったとは言っても、九月十七日に移動したというのが正しい言い方かもしれません。残念ですが金曜日は普通授業。お弁当を忘れないようにしてください。遠足気分でお菓子を持ってきてはいけませんよ。」

んよ。

さて、二十一日の遠足は無くなりましたが、九十年以上前の五月二十一日に亡くなった(天国に召された)方がいらっしやいます。その方は、『黄熱病』という病気を研究していた方で、その病気で亡くなりました。高学年の何人かは、分かった人がいるのではないかな。低学年の人にはヒントをもう一つ。千円札にお顔が載っているこの方、そう、野口英世さんです。

野口英世さんは、一歳になる前に囲炉裏に落ち、左手に大やけどを負い、手ははれ上がりくつついてしまします。その後、手術によって不自由ながらも左手の指が使えるようになり、医学の素晴らしさに感激し、自身も医者さんを目指します。

結局、お医者さんというより、細菌の研究をする学者になり、ノーベル医学賞の候補にもなった方です。

その野口英世さんの言葉。

『努力だ、勉強だ、それが天才だ。誰よりも三倍、四倍、五倍勉強する者、それが天才だ。』

筆箱の中にこの言葉を書いて貼っておくと、なんだか元気が出て来そうですね。

実際野口英世さんは、アメリカで勉強中、日本人は寝ないのではないかといううわさが立ったほど、猛烈に勉強なさっていたようです。

す。

私が個人的に好きなのは、こちらの言葉。『過去を変えることはできないし、変えようと思わない。なぜなら人生で変えることができるのは、自分と未来だけだからだ。』

過去は変えられないし、人を変えることも難しい。あの子が、いつもちよっかいをかけてくる。あの子がいつもたたいてくる。あの子がいなければ…と、言いたくなる気持ちも分らないでもない。でも、「あの子」を変えるのは、なかなか難しい。

もちろん、理由もないのにいつもたたいてくるような子は断じて許せません！そうではありながら、よく考えてみると、自分も他の人に、昔、同じようなことをしていたなんてことはないのでしょうか…。

過去はもう変えられない。では、どうするのか。人にやられて嫌なことは、他の人に、決してしない人間に自分を変えましょう。自分と未来は努力で変えられます。過去において人に嫌なことをしていたことに気がついた人は、すぐに『二度とやらないことに決めた。だから、君も僕に嫌なことをするのはやめてくれ。』と、きつぱりと言いましょ。

それでも相手が変わらない場合は、悩んでいないで、先生やご両親に相談。何とかあります。何とかします。

自分と未来は変えられるのですから。
(立教小学校校長 田代 正行)